

# 歌人 安江不空・序(3)

——〈大和歌〉の問題——

小野 浩

八重左久良さきのさかりとうちにはふ焼刃のあやは見さへに惜しも  
おほ本目ながれ走れる真身のはだうつりふかぶか腫を寄せがてに  
おほ和田の浪の八百重を断ちくだるくる潮に似し横刀のはだはや

右、「名号刀」連作十八首のうち三首。

文に曰く。吾蔵古刀十数口、中有備州長船長光横刀、文永年中順慶長光  
是也。其所鍛造。精勁絶倫、英傑仁義之士、古来崇之、菊池武時一揮  
之、姦賊胆寒、吾劔地中、深刻「南無阿弥陀仏」六字、蓋。名号一刀無  
比儔者、伝日、蓮如上人在紀和之間日、常持斯劔、以為守護云。

## I 日本〈水土〉(1)の現象学的考察

——その地詩学的境位——

(Die phänomenologische Betrachtung über die natürlichen Verhältnisse  
unsres Landes, — seine geopoetische Lage—)°

醇正な意味で人麻呂以後の真歌人として記別さるべき不空歌業の真髓を窺はんとするとき、何よりもまづ、わが国へ本来の言葉V、即ちへ詩語Vとしてのへ大和言葉Vの出自と本質について一応の考察を遂げておくことは、やはり廻避を許されぬ手續であると思はれる。ここで稽えられてゐるのは、もとより日本語の語法とか文法とかいふ性<sup>た</sup>の消息ではない。それも軽視されてゐるわけではなく、必要とあれば、専門諸家の教示を仰ぎたいと考へてはゐるが、事、詩語としての大和言葉に関する以上、その実作に証<sup>あかし</sup>された真正な歌人の教示を仰ぐ方が、やはり一層稔多いものかと思はれるのである。

ところでそのやうな歌人や詩人が果して存在するであらうか。恐らく寥々たるものであらうが、絶無といふこともないであらう。筆者としては、以前この点で俳論家としての大須賀乙字、歌論家としての三井甲之に教へられるところが多かつた。<sup>(2)</sup>然しへ大和言葉Vを生み、それを育くんだ日本水土のへ地詩学的(Geopoetic)な境位と、それに緊密に照応する大和言葉の受動的に感性的な性格については、詩人吉田一穂の卓抜な考察によつて、真に眼睛の刺破されるのを覚えた。よつてまづ、日本水土をめぐる一穂の雄渾な考察を紹介してみたいと思ふ。即ち彼の「黒潮回帰」の序章「極の誘ひ」は、「候鳥は風と雲の太古の騷擾を翔き、海獣らは波荒い元始の岸へ、そして何故に磁針は鯨と共にへ北Vを指すか。本能を刺す冷たい雪解の水と新しい塩、磁極に夜の座を失つて狂燥する太陽の短い北圏の夏は、南極に比して、岩礁も白い鳥糞<sup>フエ</sup>で蔽はれるごとく、一刻の生の営みを惜しむ生物群に賑ふのである。そこに生の秘密がある<sup>(3)</sup>」。

といふG線風に底響きのするアリアを以て始まる。彼の言はんとするところは、始原への根元的志向のまにまに一途に極北の元始自然を目指す集团的長程飛翔に於て、仮借なくその羽根を試めされ、風浪に揉みぬかれて益々その

激情を昂めゆく候鳥の群は、太初の生物学的に厳しい諸条件を克服することによつてその純血を保たれ、△種△は、つねに爽かな生命を元始に得て若いのだ、といふところにあつたとみてよいであらう。かくてさらにその詩想は、「海  
 圈三六〇度の眩暈<sup>めくらめ</sup>く熾んな碧水のヒステリア、溢れて天に鼓動し、日月の岸に輾転する巨大な水の球！ この荒々しい無窮動の生きもの、虚しい永遠の反覆に、無限の周囲に、自ら激昂し、粉碎する藍微塵の波の泡沫、紺に紫に緑に、結んではほぐれる水脈の錯乱、金と銀の照り返し、肺を刺すオゾン、透き冴える岩礁の水理、沸きたつ魚紋、そして僅かに海面を抜くコペルニカス以前の泥の拡がり……

雲と水、このもつとも純粋な元始に触れて、人は劫初の岸に、自ら発する声の我れの自覚から、表象の罫を編み始める。我れとは、そして世界とは何か？ かゝる問ひに誘ふ海の、またあまりにも劇しい混沌<sup>(4)</sup>！」といふ、鮮烈な原色をキャムバスに叩きつけるやうな、ゴッホ風に燦爛たる画図となつて繰りひろげられてゆく。

ところで、古代ギリシャのむかし、タアレスが、「世界の原質は水だ！」と叫んだとき、彼をこの発想へ導いたのは、潮汐の激しい日本環海の動流とは異つて、謂ば処女のやうにつつましやかなイオニア海の水であつた。<sup>(5)</sup>だが、日本の古代民族が、△海△からあらはれたといふとき、この△海△は、△海一般△を意味しない。△海の梟師△素盞鳴命に導かれて、北回帰線を超えて北進した私たちの祖先が、水天定かならぬ澎湃たる怒濤のなかに火を噴く列島を望んで、△陽出づるうまし国△を確認したとき、そこはすでに彼らの祖国であつた。「……海は声高く歌ひ、魚は湧き立つてゐた。彼等は日本列島の脊梁を踏んで、天地創業の雄叫びに雲呼び、波に応へて、とどまるを残し、更らに新たな夢と混沌の中へ船出していつた。氷霧の彼方から、今なほ我々の胸にひびいてくる波の鼓動の荒神たちの歌をきく。」<sup>(6)</sup>

この△火環弧島△の自然は、まことに神々に溢れてゐた。古代神話に、またいまなほ連綿とつづけられてゐる太古そのままの祭祀に私たちは天神地祇との交感と交流の消息をうつつく、体感することができるだらう。とりわけ海神を

奉祀する大社古社の数も多く、いづれも独自の祭祀を絶やささない。そしてここにこそ私たちは、 $\wedge$ 海の民 $\vee$ としての日本古族の元始の姿を髣髴することが出来るのである。一穂の詩筆は、この $\wedge$ 海の民 $\vee$ を生みまた育てた $\wedge$ 環海 $\vee$ の生ける姿を朗々と詠ひあげる。

「極東の島々を洗ふ黒潮に棹さし、背に太陽の運命を負つて現はれたわが古代民族は、その荒ぶる波の猛々しい性、さが明るい海光の感覚、つねに屈託しらぬ冒険的な進取の気、天を指して潮流の行衛を計る、直接的な営みの、楽天的で、もつとも男性的な、いはばそれは太陽の子らなる自然民族であつた。同時に彼等は、無限の太平洋を控へて東海の絶端に位置する絃曲線の決定的な地理的環境と、その性格の発展性に於て、将来、この民族の衝面すべき運命を荷負つてゐた。大陸移動によつて陥没した溝であらうと、日本海以前の原日本人なるものが考へられない限り、焰を吐く火環島弧の荒い自然を踏んだ民族は、海の民であつた。潮に乗りて来れるものを主導旋律として、この幻想曲を編むならば、日本沿岸を洗ふ強力な大動脈は、赤道直下の太陽に暖められて、ドリヤンや檳榔樹の島々を環り、ヘレン礁やガルベス堆、エスメラルダ洲を洗ひ、豊かなプランクトンと塩分を含み、種多の魚族を擁して北上し、珊瑚を養ひ、真珠を生み、椰子の実とともに、歓呼して東海の島曲に灌ぎ入る黒潮である。この暖流はわが風土の稔りを培ひ、緑の鮮かさを新たにするばかりか、ベーリングやオホツクの寒流と衝激し、大陸からの河流と抗ひ、海溝底流やガルフ・ストリーム流と接して起す対流圏に、豊漁の魚群を集めて、到るところ魚礁を成し、海産日本の優位を確保せしめた。白鳥や海蛇、キグモス、ヒドドラ巨鯨の天の物語を指さす水平線の彼方へ、魚脈に乗る鷗の夢を追うて漂流し、或は颯風の眼を掠めて新しき土地を求め、北回帰線の波飛沫を潜り、この潮に乗じ来れる南方民族のあることは、今なほそれら諸島に遺る人種的、民俗的な共通性に徴し、日本からの逆分岐としても、交流のあつた事は否み難い。(7)」

まことに地上究極の生命線たる極東のこの $\wedge$ 火環島弧 $\vee$ に、土着の原住民はもとより、北から南から、西から東から、さまざまの諸族が絡繹とし来り会し、また別れ去り、その各々がそれらの夢と血を賭けた劇烈な戦闘に訴へて

雌雄を決しつつ、或は無遠慮に凱歌を奏し、或は悲痛極りなき慟哭の声をひびかせ、勝利と敗北を繰返しながら、優勝劣敗の嚴酷なる法則のまにまに、やがて優勢種としての大和民族を形質する根原的要因が徐々に熟成されて行つたであらう。

然し背に太陽を負ひ来つて、濤波と疾風との生死の境をくぐりぬけ、このへうまし国Vを拓いた古代日本人たちも、そのへ水土Vの並はづれたへ湿潤Vのゆゑに、豪雨に洗はれ、烈風に吹かれ曝らされ、為めに山々ますます碧く、清々しく、水また澄澈せるこの国土に馴染みを重ねて、心神の鎮静が進むにつれ、徐々に、しかしやがて徹底的にその体質も心識も、感能も情緒も変質を遂げぬわけにはゆかなかつたであらう。

もとより海洋を生活本来の場とする人々にとつて、潮汐の干満、月の盈虧といふ宇宙的拍節を以て営まれる大法則に随順することなしには、一切の生活の成り立たぬことは、肝に銘ずるところであつたらうし、北回帰線を超えたものにとつて、北斗七星は即ちゆるぎなきその羅針盤となつたであらう。また一旦、山野に入つて海に疎遠になつた獵人耕夫たちもこの水土の特殊性に精通せずしては自然人としての生活の滑かな運行の期しがたいのをさとつて、大陰に帰向する陰曆の民となつて行つたのも、また自然の成りゆきであつた。そして漢文化の渡来と、インド文化との接触のうち、始原的なこの太陽の児たちからも、次第に豪放な哄笑が影をひそめ、春夏秋冬の鮮かな、また微妙な推移と交替のうち、自然の繊細なニュアンスに敏感なへ文化人Vへの変移が行はれたのもまた自然の数であつたと思はれる。そして遙か後代ともなればこの波荒き環海は、長期に亘つてへ鎖国政策Vを援護する要塞にされてしまひ、へ海の民Vはその本来の黒潮的 Dynamik を忘れ去り、八幡大菩薩の旌旗を翻して、長駆東亜諸族の心胆を寒からしめたへ八幡船Vの雄図も、蛮族の海賊行為程度にしか考へられなくなつてしまふ。まことに当時、和寇となつて現象したへ海の民Vの深強なるエネルギーを、現代に於て想像することは殆ど不可能に近いであらう。沙漠系のデーモン・マルクス及びその末派に致された粗暴低脳なゲヴァ学生、<sup>(8)</sup>自身は危きを避け、安全地帯から陰に陽にこれを煽動

使喚したイムポテントな大学教師輩、これら道聴塗説の徒の叫喚も怒号も眩きも、それに比すれば、まことに浅ましく高の知れたものにすぎなかつた。四百余州を制圧した元の大軍を一挙に潰滅せしめたのは八神風Vであつたと言へば、不治のノイローゼ患者たる知識人たちは一斉に皆に皺をよせて冷笑するのをつねとするが、あれは八海の民Vの竜巻に似た冲天の意気が、宇宙四大と交感するところに、おのずから発した一種の八神異現象Vであり、生の限界情況に身を以て出入したことがある人なら、何人も身に覚えのあるはずのものと思はれる。

本来の八海の民Vたる日本古族が、海の神々に捧げた神情の深邃と雄渾さは、たとへば浪速なる住吉大社の神前に額づくとき、今日もなほうつく、それを体感することが出来るであらう。底つ磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて神鎮まりますこの海神参社<sup>(9)</sup>は、稜々たる一軸線上にゆるぎなく並び立ち、恰も満帆に風を孕み、舳艫相啣みつつ大海原に進出せんとする大船巨舶を幻視せしめる。人はそこに、うつく、神威をかかふり、頂天立地、乾坤に卓立せんとした日本古族の威風を、今日もなほまなかひに仰視することを許される。しかもこの大社が古来、八和歌Vの秘機を司る聖処であることも、人は忘るべきではないであらう。

ところで徳川三百年の升平を支えた消極的な八鎖国政策Vの功罪については、今さら論議の要はないと思はれる。中世戦乱の暗黒と戦慄から生れた封建制度のもとで典型化した武士階級のうちに、一応、日本人の血の純潔は保持され、国土は侵襲から守られた。これは八鎖国政策Vの功績の一つと言へようが、然しそれも長期に亘れば、流動を停止した水が変質するやうに、敗血現象を呈し、陰性な町人階級の拝金享楽主義の汚染を蒙り、荒海稼ぎの豪宕な気風は影をひそめ、退嬰小康の島国根性が一世を風靡することになる。すべては海を忘れたところに発するのである。

幕末日本に開国を強要したものは、本来の文化生産主体としては、すでに動脈硬化期に入り、それゆゑ専ら帝国主義的海賊行為に訴えて暴富を抱へこんだ西欧諸族である。その尖兵となつて白蟻のやうに日本中枢に喰ひこんだものの正体については前章<sup>(10)</sup>に於て述べられた。何はともあれ明治以後の日本は八海の民Vとしての本分を遺忘し、本末顛

倒してつねに西欧沙、海賊の末裔に致されてきた。黒潮動流する火環島弧に生を享けながら、海を忘れたものが少くなかつたのである。そしてその情況は現代に於ても、その大勢に於て変化をみない。——海の子は塾つ子となり唱歌消え、——旬日前の読売紙にみたところであるが、この川柳子とそのさりげなき諷誦に籠められた嘆きと憤りを等しくする人の数も最早多くはないであらう。またもや私たちは、文部官僚の一部に喰ひこんである白蟻の悪質性を改めて思ひ知らされる。だが一穂も言ふやうに、海は依然として鞆鞆の声をあげてゐる。私たちは海から来た宗祖の裔である。「その血液のうちに海は原生質プロトプラスムの染色素をなしてゐる。ひとたび海に入らば彼らの元始は甦(11)へるであらう。」

## 2

以上のやうな一穂の *geopoetisch* に昂揚した考察を、謂はば蒸溜して一篇の優れた詩篇となしたのは高村光太郎であつた。光太郎の詩集「大いなる日に」は、大東亜戦中の諷詠なるゆゑを以て、△文化人▽諸氏はこれに触れることを避ける風があるが、本集に収められた一全篇とまでは言はぬとしても、少くとも数篇は、日本新詩中の最高作に加へらるべきものであらう。とりわけ、「地理の書」はまことに卓抜であり、以上縷説の一穂の△地詩学的考察▽に緊密に呼応し、内外出入、表裏開合の妙をつくす観がある。以下ここにその全篇掲げて、その間の消息を窺ふよすがとしたい。

## 地理の書

深いタスカロラ海溝に沈む赤粘土を圧して

九千米メートルの絶壁にのしかかる日本島こそ

あやふくアジアの最後を支へる。

崑崙は一度海に没して又筑紫に上る。  
両手をひろげて大陸の没落を救ふもの  
日本南北の両彎は日本の杭となり  
そのまん中の大地溝に富士は秀でる。

この地わかく火を蔵し火を噴き  
地下水熱湯となつて流れあふれ  
一切のもの内に深く激越の情を蓄へ  
しかも湛へては靈泉の温雅となる。  
輝石安山岩は北方の城壁  
角閃安山岩は南方の砦  
空高く内奥のガスを吐いて  
この列島は聳え立つ。

大地のブロック縦横にかさなり  
断層数知れず  
絶えずうごき  
絶えず震ひ  
都会はたちまち灰燼となり



海はふくれて海嘯よだとなる。

決してゆるさぬ天然の気魄は  
ここに住むものをたたき上げ

危険は日常の糧となり

死はむしろ隣人である。

錯落参差

山も河も岸辺も野原も

入念に刻まれ叮嚀に仕上げられ

裏まですてず研がれ磨かれ

鷹のやうに敏く

燐のやうにあやふく

天地の毛細管はここにあつまり

神経の末端は露出する。

日本列島をかこむもの水

日本列島をつつむものまた水。

湿度一〇〇の一〇〇

気流は常にサイパンあたりから生れ

黒潮に乗つて膨脹する。

靄と霧と雨と雪と

この栄養の飽食に

人は袒裸をよろこび

青葉若葉は富士をうづめ

石の殿堂は発汗する。

水蒸気この島にヴェイルをかけ

天然の強<sup>こゝろ</sup>もてを中和する。

天象の眼はうるみ

睫毛ながく影をおとし

色にどぎついもの無く

香りに鼻をつくもの無く

鳥獣虫魚群を成し

草木みやび

物みな品<sup>しな</sup>くだらず

決然としていきぎよく

淡淡として死に又生きる。

稲の穂いちめんになびき

人満ちみちてあふれやまず

おのづからどつと堰を切る。

大陸の横圧力で隆起した日本彎が

今大陸を支へるのだ。

崑崙と樺太とにつながる地脈はここに尽き

うしろは懸崖の海溝だ。

退き難い特異の地形を天然は

氷河のむかしからもう築いた。

これがアジアの最後を支へるもの

日本列島の地理第一課だ。

## Ⅱ 〈大和言葉〉の受動的に感性的性格

(Der passiv sinnlich-gefühlsmäßige Charakter des echtjapanischen  
Wortes.)

1

以上のやうな両詩人の考察と諷詠の精髓を要約すれば、山々碧く、ときに紫を帯びて潤雅に、水は澄澈して玉の如

くまた鏡のやうな日本の自然も、このやうな日本水土のおのづからなる現成であり、たとへば道元禅師の「山水経」なども一ひとり「山水経」に限られないが、単なる宗教的信条の説示に終始する経巻の類などではなく、日本本来の水土との緊密な応和に於て詠ひ上げられた絶類の詩篇となつてくるのだが、それもまた決して偶然ではなかつた。日本民族に本来の感性の深潤と浄潔も山青く水清きこのやうな△水土▽との応和に於てだけではなく、ときに大厦高樓を崩壊せしめ、大船巨舶を海中に溺没させる地震津波颶風豪雨との常住の対決のうちに、「裏まで捨てず研がれ磨かれ」たによるものではなかつたか。私たちの言も語も、この△水土▽との緊密な△応和▽と△対決▽のうちに育くまれ展開されたものであることに疑ひの余地はないであらう。

然し△対決▽と言つてもそれは、人間がその自力を恃んで自然を征服せんとする西欧風に能動的なものではなく、人力によつては遂に左右し得ぬものへの畏敬の念を寤寐忘れることなく、深き随順の至情に発して、順風にはま、と、に逆風にはま、ぎりに帆を整へ、風なければ風なきに應じて操帆のことに従ひ、どのやうな難境にも柔軟に対処し、以てその透過を期するのである。このやうな大いなる△受動性 (Passivity)▽は、ひとへに黒潮めぐる風濤荒きこの△火環島弧▽に於て長養された民族的叡知であつたと言つてよからう。

このやうな根元的に△受動的▽な民族性のうちに孕まれ育くまれた△大和言葉▽が、受動的性格のものであるのも、また自然であると言はなければならない。

従つてそれは鮮かに移りかはる季節のめぐりを送りまた迎へ、歓喜と悲哀、躍動と鎮静の起伏明暗交替のうちに、微妙にして豊かなオノマトペイエンを産み、それらを核心に鏤めながら、季節に敏感に照応する独自の感性語を生み、また育くんでゆく。

もとより言語の通性として次のやうなことは認められる、即ち、このやうな感性語も、謂ば細胞分裂を繰り返しながら品詞をひろげ、具象から抽象へと進んで、次第に命題形成の可能性を孕み、思考の論理それ自体にも発展すると

いふこと。

詩的発想の萌芽を豊かに包蔵しながらも、シナ語には、その特有な観念的操作に於て、人を説得しようとする傾向が著しい。私たちの祖先は、孔孟老荘の言説に馴染を重ね、とりわけ孟子の革命的に政治倫理的イデオロギーや朱子学派の抽象的形而上学の訓練をうけつつ、また一方にはひとたび因明論理学の門内などを窺ったこともある以上、数世紀の星霜を経て、さすがの $\wedge$ 大和言葉 $\vee$ にも、シナ・インド風の苔のやうなものが蒸してきたことも否定できないであらう。然しその核心に於てあくまで $\wedge$ 感性的 $\vee$ を本領とする $\wedge$ 大和言葉 $\vee$ にあつては、 $\wedge$ 汎神論的性格 $\vee$ が本来のものであり、そこで人間と自然とは同位性の次元に於て把握されたのであるが、これは自然環境に直接な漁獵農耕の民族としてはまことにおのづからなる帰趨であつたと言つてよいであらう。

## 2

このやうにして汎神論的に感性的な日本民族は、生ける森羅万象を母乳としてそれと深密に交感しつつ、その母語を育成した。即ち春夏秋冬に於て、それ $\wedge$ の夜空を荘嚴する爛たる星辰の姿象、潮汐の干満につれて巨大な生きもの $\wedge$ のやうに呼吸する海潮の動流、空と海との描く運動曲線、月の盈虧に具現された宇宙的な波長と周期などは、その反覆、高低、長短の絶妙な拍節を以て、自然暦のこの民の心の琴線に微妙な顫動を与へたであらう。メローディアスな音律と情緒の歌の成立からしてすでに季感的である。抽象的論理を足がかりに体系形成に傾斜しがちなインド・ユーロピアン語系とは異つて、この感性語の始原は、何よりもまづ $\wedge$ ものまねび $\vee$ であり、乳房をふくみつつ、母の口から耳に伝へられた片言隻句の口ごもる発声であり—これは或る程度まで人類共通のものかも知れぬが—、日本の場合はとりわけ、「始めに耳ありき—」であつたと言つてよからう。オノマトペーイエンの豊けさが、他国に比類をみないところからも、それは言へるのではないであらうか。また久しい間、文字に頼ることなく、口から耳への直接の

コミュニケーションを以て心と心を通じあつてきたところからもそれは言つてよいとは思はれる。話し言葉の音綴と語法とは、独自の音律に支配されつつ、遼古の口誦時代にすでに成立してゐたものであらう。即ち文字なき自然人としての悠遠な生活の流のなかで、音声組織の固有な感性語系が基礎づけられた。文字あるばかりに、論理的抽象と抽象的論理に凝固しがちなシナ語などとは異つて、文字なき時代の $\wedge$ 大和言葉 $\vee$ は、具象的な季語、その没主格性、敬語、テニヲハ、助詞、夥しい拗音語などと相俟つて、感覺的に直情的で、知性による理解よりも感得にまさり、理詰め $\wedge$ の証明よりも諧和にすぐれ、他に訴へるよりも自らに嘆くといふやうな語感語法に長けてゐるが、一括してこれを情緒的旋法と称してもよいであらう。それはニュアンスと隱喩の世界である。漢字を輸入して和音の当字とし、大和言葉本来の語法によつて訓点をつける、やがて漢字をやわらげて平仮名をつくり、書体も優艶な草仮名として秀麗な和文体を現成した。 $\wedge$ 大和言葉 $\vee$ に固有な感性は柔軟に異物を受容して安らかにそれを同化し、本来の志向にそぐはぬものは、いつの間にかこれを排除し或は消却してしまふ。

自然即生活の感性語に胚胎された歌謡の伝統が漢字を借りて、神々の手拍子に古事記となり、古代語の原質を失ふことなく、それを万葉仮名に収攬して四千五百余の長短歌に爽やかに歌声を響かせた。然し長期に亘る漢文化の崇拜と、太子の自覚的摂取を基礎としたとは言へ、エキゾチックなインド文化への傾倒や心酔のうちに、長期の中世を経過しつつも、やがて新古今集の幽玄体に於て、また業平の伊勢物語などに於て、漢詩に対する $\wedge$ 大和歌 $\vee$ の自覚も漸く明かとなり、詩語としての $\wedge$ 大和言葉 $\vee$ も略々その完成の域に近づいたものと思はれる。然し万葉仮名による表記は、必ずしも完璧なものではなく、古代国語が有してゐたと思はれる黒潮的に豪宕なアクセントは消えて、大和言葉風 $\wedge$ にやわらげられて行つたであらう。従つて故橋本博士などがその上代語研究で指摘されたやうに、私たちの耳には最早聴き得ない古代語のあつたことは、一応心得ておかなくてはならないと思はれる。

「言ふやうに書く」とは聴くことを前提とする。そして文字によることをしなかつた古代人の聴覚は、現代人の

想像を絶して卓越してゐたであらう。然し聴覚を主軸とした古代的記憶は、古事記が書写されるやうになつた時代以降、急速に衰弱して行つたであらうこともまた想はなければならぬ。蓋し漢字が書写に採用されたとき、それは古代人の聴覚的記憶に緊密に対応するものでは最早なかつたであらうから。

音数律格の原型を示すと思はれる古事記歌謡の、どこか稚拙で間延びした調子は、恐らく漢字の一単位読みによる根元的アクセントの喪失に由来するものであり、必ずしも原調そのものではなかつたであらう。

△橋Vと△箸Vのやうにアクセントによつて区別せられるホモニュームの夥しいことを考へれば、日本語にもアクセントがなかつたわけではなく、擬音発生の上代語には、とりわけそれが著しかつたに違ない。すでに奈良期に先立つ二百年前に、漢文化が入つてゐながら、四声も平仄も古代音数律を侵すことが出来なかつたほど、それはその核心に於てはすでに確立されてゐたのだが、書写のための漢字の採用に於て、自国語の古代韻を消去してしまつたことも少くなかつたであらう。

## 3

日本語は音数単位でありながら、欠くれば語尾母音を延ばして間を埋め、余れば刻みを早めて一定数に収まる。但基本的には、音数の切点、二音、三音の音律意識の単位がある。音数律の性格は、強弱ではなく、高低の波状曲線であり、平仄の抑揚律やリズムではなくメロディーである。

二音は平滑で協和し、その繰返しは速度を生み、三音は渋滞し重々しく吃り勝ちであり不協和性をもつ。この二者の組みあはせから、五・七・五・七・七の黄金律を達成した△大和歌Vは、自らの比率の上に立つ純粹結唱の最初の主体として、日常語から分離して独立した。それは心理的に昂奮持続の形式としての感動律である。「さねさし相模の小野に燃ゆる火の 火中ほなかに立ちて とひし君はも」のかの絶唱には、すでに万葉以前に於けるその完璧な原型が

みられる。この弟橘比売命の灼熱した相聞歌の傍に据ゑれば、同じ焼津の八死の灰Vを詠みこんだ現代のイデオロギ  
ー歌など、忽ち一炬に付せられてしまふであらう。国語本来の感性を無視して、どこに日本本来の詩歌があり得よう  
か。

謂はば建築学的に宏壯な漢文化の崇拜と、仏教によつて色濃く染め上げられたインド風に異国的な文化による爛醉  
に足許も定まらぬ殿上人や知識階級を余所目にみて、万葉時代の日本人は、東歌の庶民に到るまで、健康で明るく、  
解放的に感性的な日常語の泉に浸って、その感性を爽かにしたのであり、そこからこそ万葉の全歌は放射されたので  
ある。本来の大和文化は、沖積土風にモニュメンタルなシナ文化とは、言語組織も生活様式も全く異なる。漢詩作法  
に倣って、どれほど小賢しく歌学を体系立ててみたところで、その発想も結論も、醇乎として日本の性格のものだつ  
たのである。

一方、日本の八散文Vなるものは、形式と呼ばれ得るいかなる章法も持ち得なかつた。すべては時代の紆余曲折に  
沿ふて流れゆく当用文体であり、謂はば風俗文体にすぎない。然し八大和歌Vは自然即生活に発しながら、その声は天  
に銜して己に返つたとき、全く別趣な客体化を遂げてゐた、即ち垂直の八詩Vと化したのである。遠く呼び、内に応  
ふるもの、これが原型である。戦乱の中世に於ては、自然に直接な太陽の民の裔なる庶民の流離の嘆きもその声をひ  
そめ、草深きところに隠れた。デカダン末期の荒廃を意味する所謂八歌学Vなるものは、宮廷歌人と特権階級の文芸  
学的手すさびであり、冷く着すました八石女V以外の何ものでもなかつた。

インドやシナの異質文化にも己を空うして胸襟をひらき、その毒性はこれを中和し、澱<sup>おち</sup>は丁寧に瀘<sup>ろ</sup>過し、それらに  
その本来の活性を賦与し得たのも、日本民族の宇宙的に受動的な性格と、そこに生れそこに育くまれた卓抜な感性語  
に於てのことであつた。「上代の素朴な直情あふるるままの生な明るさは一気呵成に歌ふか、激情に吃る稚拙のゆゑ  
の快調ではあるが、言語組織のメロディーアスな性格が短歌に悲調を帯びさせるので、アクサンを欠いて軽快な速度



のリズムは生じない。短歌が和楽と同様、旋法によつて感傷にひきこまれやすい和音性を備へてゐるのも、そのためである。もともと日本人の感性が、自然に対して素直であり、融和することにあつて、レアクションだつたり、反抗したり、征服しようとする能動者のそれではない。このやうにして出来た言語と短歌の民族は、他国に類例がなく、万人悉く歌心を体してゐる。理窟なく直情的に感得し合ふ語感に心を抒べうるからである」と、一穂は言ふ。<sup>(12)</sup>このことは、単に歌俳専門誌だけでなく、日刊月刊の新聞雑誌の歌俳欄に於ける庶民諷詠の賑かさに照しても、直ちに納得されるであらう。

然し短歌は平談俗語の口語文体、また散文などのいかなる平叙法によるものでもなく、それが一個の詩として短歌それ自体をなす文法によつて独立する。このやうに分離されて一個の自然の形となつたとき、まさに碑よりも固いその存在性は、古代人にとつては、祈をこめて清祓された一個の聖物であり、デモオニッシュな何物かであつた。この∧呪現性∨を無視しては、短歌文法の自足性とその起源とは覆没されてしまふであらう。短歌は万人の形式たることに於て齊唱され、詠み人知らずであるべきことは、その没主体の文体たることに於て、すでに証<sup>あかし</sup>されてゐると言つてよからう。

## 4

よつてその簡潔純素な形式のゆゑに、玩弄と濫用にまかされ、千余年の星霜を閲して瘠せ衰へ、磨滅して手垢にまみれた通貨のやうなものに成りはたこの短歌が、西欧文化の上陸とともに燃え上つた明治ロマンチズムの熔炉のなかへ投入され、斬新な意匠の刻印を打たれて生れ変つたとき、その妖しい輝きに眩惑されて人々は、末期キリスト教的ヒューマニズムに絡みついて渡来した無気味なデーモンの吹きおこした妖火もまた、それに一役買つてゐたといふ隠微な消息にまで、想ひ及ぶことはなかつたと思はれる。

ところがこの火種を吹きつけたかのデーモンは、ときにその妖しき姿影を垣間みせつつ、△自我の尊重▽と△人間の解放▽を合言葉に、益々その火勢を煽り立てながら、ランシアン・レヂームの朽敗した箇所を燃え移らせゆく。そして意外にも無抵抗な炎上に味をしめたかのデーモンは、益々巧妙に△進歩主義▽たちを使喚して、本来焼くべからざるものまで焼かしめようと試みた。それぞれ独自の因縁によるものでもあらうが、法外に熾盛な△Res-sentimentgefühl▽以外に何程の取柄もなき、△進歩妄想▽にかされたこれら侏儒たちも、さすが国家民族の危急の日には巧みに擬装し、また地下にひそみはしたものの、放火の術の探究の手は休めず、終戦とともにまた一斉に地上に姿をあらはし、仮面はこれを一擲して大規模に徒党を組み、大学、政党・新聞雑誌、テレヴィ、映画・ラヂオ、財界などの各方面に無数の拠点を確保し、叫喚怒号飽くことなく、放火の樂慾を堪能せしめた。その頂点を刻したものであるとして私たちは、ゲヴァ学生たちによる△安田講堂▽占拠の日をあげることが出来るであらう。当時、彼らの目指した△革命▽の時節はまだ熟してはゐなかつた。一方ではまた満を持してしかも放たず、時節の純熟を待つ忍耐力が彼らに欠けてゐたこともあつて、彼らとしては九仞の功を一簣に虧く仕儀となつたのである。明治中期以来、大正昭和を通じて妖魅の頑強な使喚と、肚に一物も二物もあるその大規模な援助をうけて營々として蓄積されてきた△革命▽のための全エネルギーは、泳え性のないゲヴァ学生たちの尚早な暴発によつて一気に放出されつくした。彼らとしては、一世を風靡したイデオロギーに全身を托し、それ〴〵宥めがたい△怨恨感情▽をその捨身<sup>すてみ</sup>な行動のうち燃焼させようとしたのであらうが、要するに偏狭な自我意識にかまけて企まれた民族に対する叛逆行為が、大局に於て稔を結び得ぬことは、始めから念頭になかつたであらう。あの日以来、学生運動の頽勢は著しく、往年の充足状態を達成することは最早不可能であると思はれる。

一方、大正デモクラシー——その萌芽はすでに明治末期に認められる——と歩調をあはせて、昭和に入つて益々その暴状を募らせ、終戦後は日本全歌壇を占拠した所謂「歌人族」なるものの妖しき正体もまた看過することはできない。彼らは、宇宙的に受動的な感性語としての「大和言葉」のこともなく念頭になく、自力を恃む抽象的な観念語——しかも世期末的頹廢に墮した近代西欧語法をカノンと仰いで、ときに口語体のイデオロギー歌を怒号し、またノイローゼ的なニヒリズム歌、モダニズムと称する得体の知れぬ闇汁歌、誤謬だらけの鶴的雑炊歌などを仔細ありげに低唱微吟してみせたりしながら、ジャーナリズムと結託して俗衆を誑かしつづけたが、それら偽擬歌人たちも、遂にゲヴァ学生並の浅はかな Dynamik と劣悪な技巧を蕩尽し去つた揚句、進退ともに目途のつきかねる袋小路に追いつめられたやうにみえる。今、彼らはかつて無思慮にも自分たちの手で焼き払はれた廃墟を目前に、老残の身を託ちつつ、その残灰を手にしたまま呆然自失してゐるやうにみえる。それはもとより自業自得と言ふべきだが、彼らの吐き散らした偽擬歌は、恰も使ひ捨てられたプラスチック器物の如く、さすがの劫火にも焼けず、曇々として焼土にその醜骸を曝してゐる。屈強な猛犬にこれを与へても見向きもしないであらう。悪質な消化不良をおこすことを知悉してゐるからである。

## 6

然し雑草一本も生えかねるやうにみえたこのやうな焼土の片隅にも、終戦後十余年ともなれば春を待ちかねたやうに、離々として歌草の芽生へるのがみられた。もとよりそれは「大和歌」を荒廃させた「専門歌人」の作ではなく、匠気には無縁の名もなき人々の素朴な詠草ではあつたが。

だがそれら若き歌人たちを、真の「大和歌」の詠み手として培ふべき指導者は殆ど種切れに近かつた。土屋文明翁などはその類稀な一人かと思はれる。翁も囑目の風物詠や身边雑詠などには一応秀作がなくもないやうだが、「詠み

人知らずVの域に出入する古典的名歌といふものが果して何首あるであらうか。

## 7

現代が有史以来の人類の危機であることは何人も痛感してゐるところであり、今さらこれを言挙することは寧ろ面映いほどのものであるが、その由つて来るところはあくまで明確に見究はめておかななくてはならないだらう。即ちその真の禍源はAヘブライーキリスト的世界否定 (die hebräisch-christliche Weltverneinung) VにありとするK・レエヴィトの卓見に照準し、刻々に途方もなく増幅されてゆくその射程の無気味さをまじろぐことなく測知する努力を、私たちは怠つてはならぬと思はれる。このやうなA世界否定Vは、湿潤と乾燥との中間風土に住む西欧諸族がAヘブライ的Vキリスト教を受容した日以来、その頭上にも重苦しくのしかかつてきたものである。千余年に亘るこのやうな世界否定の圧虐のもとで、学問も芸術も宿命的に厳しい規定を蒙り、福音書に窺はれるイエス風の宗教性のもつ潤ひが取戻しがたく失はれてゆくにつれて、遂に乾燥の極に達した西欧の知性が、沙漠的性格のものに変質し、宿命的に必然的に原水爆を産み出したものと考へられる。

此処まで来れば、西欧の文化も文明も、遂に終着駅に達し、このままではA自壊V以外に行き場はないと思はれる。A反核運動Vをどれ程、強化してみても、A核兵器Vを生み、また生みつづけざるを得ない禍源の正体に目をつむり、それを放置したままでは、地球と人類の壊滅は免かれるわけにはゆかないだらう。

成程、人は西欧文化、とりわけその文明に、Aヘブライーキリスト教的V一層適切には、Aヘブライーパリサイ教的Vと言はるべきであらう——世界否定の性格が著しいことを看過することは許されないのであらう。然し一方、ゲエテなども指摘してゐるやうに、<sup>(14)</sup>四福音書から窺はれるイエスの宗教性は、ヘブライ風に乾燥した沙漠的性格のものではなく、人間の生を根元からうるほすに足る大乘的潤性に豊かなもので、西欧には、Aイエス・キリスト教的<sup>(14)</sup>世界肯

定 (Jesus-christliche Weltbejahung) に随順して文化の生産と建設に従つた卓抜な思想家、詩人、芸術家も少くなかつたのである。

西欧精神史を通観する人は、この両者が峻しく対決しあつてゐるだけでなく、ときには奇妙に重りあつたり、入りまじつたり、親しく手をとりあつたりしてゐることに驚かされるであらう。その対決対応の様相は極めて複雑であり、研究者は清澄な眼睛を以て精緻綿密に一々の真相を透察してゆかなければならないであらう。

もともと、レエヴィットの所謂「ヘブライーキリスト教的」世界否定<sup>1</sup>に対する本能的嫌悪の情に発して、長期に亘りこれを強項に拒否しつづけてきたのは、他ならぬゲルマン族であつた。すでに原故郷たる元始の森を去つて、全民族的に漂泊の生活に入つてゐたとは言へ、なほ剛直なこの古族が、その素朴な帰依の信情を捧げることのできたのは、福音書に髣髴されるイエス・キリストであつただけに、ユダヤ人サウロ事パウルスによつて摩り替へられた<sup>カトリック(15)</sup>「正教」<sup>2</sup>に対しては永く「胡散感」<sup>3</sup>を失はず、やがてそこからマイスター・エクハルトのやうな卓然たる宗教者を生み出すことになる。然しさすがのエクハルトの偉業も、その勢力は、当時にあつては微々たるものにすぎず、間もなくローマによつて徹底的に弾圧され根こぎにされてしまつたが、地下深くひそんだその水脈は、凡そ三百年の歳月を隔てて「エクハルト」に直接の脈絡はなかつたが「ルター」一派の劇烈なプロテストとなつて噴出する。「新教」<sup>4</sup>とは誰の訳か詳かでないが、これほどの誤訳は数多くないであらう。

## 8

ところで「Gott ist tot」<sup>5</sup>といふニイチェの言挙は、実に十数世紀に亘る西欧精神史の流が、乾燥の極、沙漠に化し去つてしまふことを的確に予言したものととして、まことに恐るべき内容を含むものであつた。本来自力的能動性を恃んで、観念的に抽象的に世界を解明し、これを征服せんとする傾向の著しい西欧の知性は、ここに一滴のうるほひ

も許さぬ乾燥の極に達し、原水爆を始め、専ら地球人類殲滅の科学技術の推進に狂奔することになる。そしてこのやうに宿命的な科学技術の必然的所産としての△原爆▽の言語同断な惨害を、まともに浴びた第一の国は実に日本であつた。まことに肝肺熱す、痛恨の極みと言はなければならない。

だが△核兵器▽の発明こそ、宇宙に対する最大の反逆であり、瀆神そのものであり、何ものによつても償ひ得ない最悪の△玄罪▽ではないであらうか。西欧の科学と技術に学び、これをさらに開発し活用しながらも、恐らく間一髪のところ、その発明に到らなかつたことを私たちは神明に感謝しなければならぬ。まさにこれは神の恩寵に浴してのことであり、断じて自ら矜恃すべきことには属しない。この事を私たちは疎かに稽えてはならないだらう。蓋し原水爆を発明した人々、そのやうな人類殲滅兵器の実地使用を敢てし、益々その可能性をひろげつつある国々や人々が、その償ひを課せられる日は、来ずには済まないと思はれるからである。もとよりこの地上に人類として連帯生活を営む以上、ひとり日本だけが責任をまぬかれ得るものではなく、応分の禊(身削ぎ)は謙虚に覚悟すべきものと廻はれる。同時にまた東西諸族の醇真な人々から寄せられた多年に亘る真の助力と友誼を忘れることなく、恐らくは廻避不可能かと考へられる未曾有の△大機▽に当つて、世界と人類の安寧のために、真の日本としてとるべき最善の方途がどのやうなものか心して想ひ定めておくべきでもあらう。<sup>(16)</sup>

K・レエヴィットの所謂△ヘブライーキリスト教的―一層適切には、△ヘブライーパリサイ教的―世界否定▽の傾向は十九世紀の進行とともに漸く顕著となり、核兵器の開発とともに沙漠的乾燥の極に達し、ニヒリズムはここに余す限なくそのヴェールを脱し、真に恐るべき面貌を露出し、△近代▽は遂に最後期に突入した。これに比すれば、ニイチエによる△ニヒリズム▽の無気味な予告にも拘らず、そして日毎に昂進する沙漠的乾燥の不快指数にも拘らず、十九世紀末から廿世紀初頭にかけての△近代前期▽にはなほ、△非沙漠的に世界肯定的▽な気圏のなかで呼吸し得た詩人も芸術家も存在した。これを言語芸術の領域についてみれば、マラルメ、ヴァレリ、リルケ、ゲオルゲ、ホーフマ

ンスタイル、イエーツなどはいづれも、沙漠的科学技術の決定的制覇以前の気圏のなかで呼吸し得た詩人たちであつたと言つてよからう。当時の特にすぐれたドイツ詩人たちがどのやうな気圏のなかで呼吸してゐたかを偲ぶよすがとしてホーフマンスタイルがゲオルゲの「魂の四季 (Das Jahr der Seele) > について書きのこした「詩についての対話 (Das Gespräch über Gedichte) からの左の一節を阿部次郎訳によつて紹介しておきたい。

クレメンスとガブリエルが窓傍に坐つて詩集「魂の四季」(Das Jahr der Seele) を読んでゐる。二人で二三の詩を読んだあとで、

クレメンス 此「四季」は美しい詩集らしいね。併し何故「魂の四季」なんて洒落れた名をつけたんだらう。僕は飾り気のない標題の方が好きだ。

ガブリエル 僕だつてさうだ。併し此標題には何の飾り気もないぢやないか。此中には秋がある、同時に秋以上がある、此中には冬がある、同時に冬以上がある。此等の四季や此等の風景は「他の物」を担ふ為の存在に過ぎない。

感情や、気分や、其他内心の最も神秘的な、底深い様々の状態は、風景や四季や、空の色や、風の氣息と一つに織られてゐる。蒸暑く、星影のない夏の夜にも、床石の湿つた匂にも、乃至如何なる地上の物にも、人間の心昂りと、憧れと、酔歌と、一言が尽せば人間の「心」の凡てが結付けられてゐる。否単に結び付けられてゐるばかりではない、命の根を其処に絡んでゐる。七首を振つて心の根を外物の地盤から截り放したら、心其物もいぢけて消えて了はう。自己を見出さうと思ふ者は心の中に沈湮してはいけない。須く眼を外に向く可きである。人間の魂は空に懸る虹のやうに、存在の絶間もない流転の上に自らを張つてゐる。人間は自己を所有してゐるのではない、自己が自ら外から吹いて来るのだ。自己は久しく外に逃れてゐた。逃れた者が「氣息」に乗じて還つて来るのだ。一体自己といふ言葉は比喻に過ぎない。其実は遠い昔に此処に巢を構へてゐた心の閃きが還つて来るのだ。尤も、還つて来るのは昔の儘の心の閃きでなくて、昔巢を構へてゐた者の子供が遙かなる望郷の思に駆られて来るものかも知

れないが、孰れにしても何物かが還つて来る。何物かが還つて来て僕等の中で他の何物かに面接する。人間の心は鳩小舎に過ぎない。

クレメンス僕は全く違つた道を辿つて同じやうな思想に到着した。一体人間に本性といふやうなものがあらうか疑なきを得ない。外界の強い力を考へると恐しくなる。

ガブリエル 併し人生をかう考へることは詩に應用すると頗る面白いことになつて来る。此考から行けば詩は心臓の狭い部屋に跼蹐する代りに、無窮の大天地をその住家とすることとなる。詩は古希臘の紫輝く雲の丘に憩ひ、風に戦慄く木々の梢に宿り、肉に媚びる夜の風に眠る。此の如きあらゆる輪廻、あらゆる冒険、あらゆる深淵、あらゆる庭園から、詩の齋し帰るものは唯人らしき感情の慄へる氣息である。遠く高く天に翔つて其光景を身に沁めて来ても、齋す処は矢張り人間の感情に過ぎない。詩の飛翔する処に限界はないが詩の本質には限界がある。詩は人間の言葉だから、天地の間を探つて持ち帰る物も人間の感情以外にはあるを得ない訳だ。<sup>(17)</sup>

当時、所謂 Naturalismus はすでにゲオルゲヤリルケの活躍によつて止を刺されてゐた。然し第一次大戦前後に勢力を振ひ、芸文を長養するよりも、寧ろその荒廢へ傾斜させた感を禁じ得ない Expressionismus の時代を経て、詩文は暫らくヘッセ、カロッサなどによつて息を吹きかへすかにみえたが、第二次大戦につづく沙漠的科學技術の人類への君臨とともに、言葉の恣意的配列を、否、その破壊を敢てするものが詩人と呼ばれるやうになるのである。ここにニイチュによつて音楽の精霊 (der Geist der Musik) と呼ばれたものに全く無縁なところで、沙漠的知性によつて冷く機械的に構成され、専ら投機的成果を狙つた十二音無調と称される非音楽に対応する非詩とも言はれるべきものが登場する。

彼此考量すれば、十九世紀西欧の摸倣に始まり、一応、藤村、晚翠に於て確立され、泣菫、有明、敏、清白、李太郎、光太郎、白秋、耽之介、朔太郎らを擁しつつ、一穂に向つて展開される日本新詩の性格は、略々近代前期的なも



のと考へておいてよいであらう。

このあたりで、明治以後に於ける日本漢詩の展開についても一瞥しておくことも無益ではないであらう。

日本漢詩の歴史は、周知の如く、六朝の詩風を範とした懐風藻とともに古く、千余年の歴史をもつものであるが、日本人の漢詩は幕末に到るまで和臭ありとして彼我ともに問題にされなかつた。それでも、荻生徂徠の詩は、一応の評価に堪えるものと考へられたやうである。彼が範と仰いだのは、明代の李攀龍、王世貞の両者であつた。然し徂徠門下の太宰春台は、師匠が金科玉条と仰いだ李王両者の瑕疵を抉摘してこれ粉碎した。続いて山本北山(信有)は、「孝経樓詩話」で、明詩は偽詩であり、「唐詩選」は偽物で、李獻吉、李于鱗の如き明詩人は、唐詩の口拍子よきものの模擬剽窃にとどまり、この程度のものに酔惑するものは、生涯・真の詩趣に無縁なるものと痛撃してゐる。かうして明詩尊崇は漸く衰へ、山本北山の提唱する宋詩の時代となるのだが、それも永くはつづかなかつた。即ち菊池五山は、「五山堂詩話」で偽唐詩を退治した山本北山の功を一応認めながらも、偽唐詩に替つて「偽宋詩」が現れたのはどうしたことかと言つてゐる。

明治時代の日本漢詩壇を牛耳つたのは、名古屋の森春濤、槐南父子だが、この両者の指標するところは益々低調となり、星巖、山陽らが着眼した清詩であつた。詩は清に到つて亡びたと言はれるが、これは槐南が後年、彼の地に渡つて親しく確認したところでもある。毛沢東もいささか詩を嗜むらしいが、真詩衰亡以後であれば、多くを期待するわけにはゆかないであらう。然しさすが文字の国のことであるから古書も多く、遺老もあれば遺風もあつて、他国人のとやかく言へないところもあると思はれる。ところが田中角栄氏が、重任を背負つて彼の国に使したとき、自作の詩を毛氏にみせたところ、毛氏はこれを賞めたといふ。この嘶を耳にして背筋が寒くなるのを覚えたのは筆者だけで

はないであらう。

ところで本国で詩の亡びようとしてゐた時代、明治大正の日本に於て、これに起死回生の活力を吹込んだ二大詩人があらはれた。一人は明治の元勳副島種臣(蒼海伯)で、一人は大正の国分青崖である。

明治初年の外務卿、松方内閣の内相、とりわけ明治天皇の侍講としての無双の大儒、副島蒼海伯の事蹟と勲功については略記するだけでも大変なので、それは一切省略することにして、大詩人としてまた大書家としての蒼海伯に対し碩学内藤湖南(虎次郎)が呈した讃辭を筆録してその偉大さを偲ぶよすがとしたい。即ち湖南はまづ蒼海の人物を、「天分の純粹なるもの」で「神仙の趣多く、自然に渾成した」ものと評し、「詩は魏晉以上にありて断々乎として齊梁に下らず」、文は「先秦の間にあり」、筆札は、「高古勁秀・名状すべからず」と評し、さすが湖南の眼睛のたゞならぬものを示してゐる。蒼海伯の詩文は令息道正氏の編輯にかかる全集全六卷(大正六年)によつてこれを窺ふことができる。古今東西を通して第一の詩宗、壯觀極りなしといふべきである。<sup>(18)</sup>

大正時代に於て日本漢詩を代表する詩人は国分青崖である。その詩品の卓抜を認め、これを絶讃したのは蒼海伯であつたことによつても、詩人としての青崖の高さを知ることが出来るだらう。<sup>(19)</sup> 両者の交情、蜜の如きものがあつたと伝へられる。彼は漢詩及び唐詩を極則とし、さらに唐詩に於ては李白と杜甫を兩宗とするものであつた。生前、詩集を刊行することがなかつた点に於て、不空と靈犀相通の幽境に遊んだ詩人であつたと思はれるが、昭和五十年(十月)に到つてはじめて令孫正胤氏並門弟諸氏によつて、「青崖詩存」上下二冊が刊行された(明德出版社)。

なほ大正昭和の詩史を眺めてゆくと、「琅玕」、「機の音」を代表作とする中勘助の詩業が卓然として秀出してゐるのがみられる。三好達治作にも勘助の詩境に通ふものがなくもないやうだが、どうも高さや風格の点で異なるやうである。中原中也以下の八坊チャン詩人Vたちについては可愛らしい、と言つて置けばよいであらう。

ところで自力的能動性にもとづいて、観念的に抽象的に宇宙と対決し、これを解析し征服せんとする△沙漠的知性▽がなほ西欧風のマスクをつけて、思想的に存分にその力量を発揮してみせたのは、所謂弁証法的哲学の領野であり、その壮大極まりなき記念碑として、ヘーゲルの哲学体系が残されてゐる。彼が△自力作善▽の抽象的観念語を自在に駆使し、その膨大な観念論体系の大伽藍を建立したとき、西欧哲学はそこに完成の極に達し、進退の自由を失つてしまつたのではないか。

もとより彼が単に抽象的な論理家であつたのでないことは、ディルタイがヘーゲルの初期神学論考に照準して、その神秘的要素を指摘してみせたところからも窺はれる。即ち彼は、キリスト教に規定された体系哲学者であつた解せらるべきである。彼の著作のうち最も私たちの関心をひくものは「歴史哲学講義 (Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte)」である。彼は「世界史」を△世界精神 (Weltgeist)▽の弁証法的運動に於ける展開の過程として把握したが、ゲエテはこれに対し、シェリングとともに△Weltseele▽をつきつけて敵しい対決の姿勢を示した。(これについては、関西ゲーテ協会年鑑第廿巻発表予定の拙論、「ゲエテのダス・デモオニッシュェとその克服への道Ⅱ」を参照されたい)。

また Kierkegaard は、ヘーゲルが、△体系▽や個々の論理的真理にかまけて、唯一眞実の△現実 (Wirklichkeit)▽即ち、面々相接して直接に△神▽に向きあふ個々の実存を遺忘した点を鋭く剔抉してこれに対決した。<sup>(20)</sup>

彼に比すればカントはなほ謙虚であつたと思はれる。蓋し旧き形而上学が無媒介に神の言葉を口にしたのに対し、彼は人間の言葉を通路として神を語らうとしたのであるから。然し人間の言葉は、人間の内部は語り得ても人間を超えたものを語ることは出来ないであらう。そこに彼の所謂△批判▽の必要があつた。△批判 (Kritik)▽とは、もとギリシャ語の△κρίνω (分つ)▽に由来する。人の言葉で語り得ることと、語り得ないものとを分つといふのが、カント

本来の心持であつたらう。ヘーゲルにはカントのこの真意が読みとれなかつたのではないか。いづれにしても彼は自力を恃む西欧知性の極限的緊張に於て、敢て自ら神の言葉を語ることによつて、人間を神の位置に据ゑた。これは明らかに古代ギリシヤ的な意味に於て△驕傲(Hybris)△の玄罪に触れるものではなかつたであらうか。

唯物論者たちはもとより△神の言葉△など始めから意に介してはゐなかつたが、人間の分際を弁へず、△神の言葉△を語ることを敢てしたヘーゲル哲学の△むなしさ△に気付かぬ筈はなかつた。彼らにとつて△イデアリスムス△とは、単に空虚な扮装にすぎず、この扮装を剥ぎとつてしまへば、そこに単なる△物△が残るにすぎなかつた。唯物論者の△ロゴス△とは、物の言葉のことなのである。然し古代の唯物論者たちが、ひたすら△物△に密着して、△物の言葉△を語らうとしたのに対して、ヘーゲル左派は、人の言葉によつて物の言葉を語らうとした。そこに人と物との弁証法的対決が認められる。即ち近代唯物論の弁証法的なる所以である。彼らは人に対する△ものの優位△を主張しながら、受動的に感性的な△大和言葉△の達人たち、世阿弥や芭蕉などとは全く次元を異にして、己を空うして△ものへゆく道△を解せず、弁証法的対決といふ闘争性を露出して、△人の言葉△を以て、△物の言葉△を奪ひ去つた。△もの△に行かずして、どうして△もの△の心△を識ることができようか。要するに、△人間の言葉△を以て△神の言葉△を篡奪したヘーゲルも、△人間の言葉△を以て△物の言葉△を略取したマルクスも、ともに△ヘブライーパリサイ的△自力作善の土壤に根差した点に於て同じ性格のものであつたと言つてよからう。<sup>(21)</sup>

## 11

明治開国とともに日本に上陸し日本を侵略しようとする下心を秘めた西欧との対決は、これを言葉の領域に即して言へば、一面建築学的に精緻な、他面論理的に説得的な雄弁宏辞の限りをつくして畳みかけてくる抽象的觀念語と、独自の受動的に心情的な感性語としての日本語との対決であつたと言つてよからう。

かつて△無敵艦隊▽を以て世界の海を制し、すでに南北両米大陸をその範囲に編み込みこんでゐた西欧帝国主義の尖兵として日本に乘陸した文明工作隊は、その鞏固に体系づけられた戦術と戦略を自在に運用し、西欧心酔者たちや△進歩主義者▽たちをおのが配下に組み入れ、着々その企図を現実化させて行つた。さすがに日本本来の文化的核心をなす詩語としての△大和言葉▽までこれを変質させることは容易ではなかつたが。与謝野晶子を盟主とする△明星派▽の詩や歌もなほ日本本来の感性語によつて飽和されてゐたし、子規の日本主義もまだ△日本イデオロギー▽まで凝固してはなかつた。門弟左千夫―殆とその半数に達する作品が拙劣で誤謬だらけであることを見遁すわけにはゆかないが―も、節も、本来の△大和言葉▽を全く忘れ去つてゐたわけでもなかつた。然し時代の潮流は益々急調となり、根岸正統派を以て任ずる三井甲之さへも、共産主義イデオロギーとの常住の対決のうちに、西欧末期の抽象的観念語の頻用に災ひされて、感性語本来の道からの逸脱を感じさせることも稀ではなくなつてゆく。況やアララギの亜流末派はもとより、上述の大多数の偽擬歌人たちは、お門違ひの抽象的観念語を△近代的▽と有難がり、遂に真醇の△大和言葉▽を亡滅の瀬戸際に追ひつめたのである。

このやうな辛洩極まる対決の過程に於て、△大和言葉▽に拭ふことのできぬ汚染を蒙らしめたものは、日本敗戦を機に、極めてラディカルな思想革命の戦略を携へて乗りこんできた○○○、これに内応して陰に陽に、△大和言葉▽破壊の機を窺つてゐた愚鈍無見識な一部文部官僚、またこれと執拗に連動をつづけてきた無慚無恥、芸術的直観力皆無の△言葉屋▽たちであり、それら△Pöbel▽どもの陰險な策謀によつて、悪法中の悪法なる△新仮名遣・漢字制限▽が、有無を言はず、全国民に強制された。民族の眞の生命を支える最も神聖な場所が、これによつて土足で踏みこじられたのであり、その打撃は眞に測り知れぬものがある。識者の粘り強き努力にも拘らず、この致命的衝撃からの恢復にはなほ多年の星霜を要するであらう。

人、或はドームやカテドラルなど、西欧大伽藍に想ひを馳せつつ、抽象的観念語の硬質性と卓抜なその素材性について語るかも知れない。もとより大和言葉は硬質なものではなく、柔軟性を特質とする。然しそれは決して単に柔軟であるだけではなく、また強靱なものでもあつて、弓弦のやうにピンと張られれば、鏘然たる底響きを発すること、すでに記紀万葉の長短歌に於て証せられたところである。

然るに西欧詩は、すでにギリシャの昔から、例へば Trimeter, Hexameter のやうに、まことに多種多様の詩形をもつもので、そのそれぞれが西欧語に特有な高低の抑揚、長短の音律の交錯を規定する厳密な作詩法を軌範とするものであつた。そしてそのやうな軌範に従つた言語配列の微妙な参差錯落の間に、生の現実から遊離しながら、仄かにそれを視影させることによつて、観念的に抽象的な、謂ば超現実的なイメージを放射するのに本来適したものであつた。そしてこのやうな傾向は、とりわけマラルメ以来、西欧近代詩の決定的カノンとして定着する。それは宇宙森羅万象の本来の生命に随順して、さながらにこれを詠ひ上げようとする受動的に感性的な大和歌とはもともとその性格を異にするものであつた。

このやうに、西欧近代後期の超現実主義は、抽象的観念語としての西欧語の本質にもとづく首尾一貫した帰結であり、本来はその一部に宿つてゐた湿潤性が喪はれて、その知性が沙漠的乾燥の極に達すれば、創作に於ても鑑賞に於ても、人間実存の参与を悉く排除する難解極まる知的謎として結晶するのは当然であり、それはそれとしてその珍奇性を以て、好事家の関心を刺戟するに足るものでもあつた。然し鑑賞者がどのやうに小賢しくそれを解釈してみせたところで、原作者は全く異つた場所から無言の冷笑を以てそれを眺め卸すにすぎなからう。西欧抽象詩を、また一般に抽象芸術なるものを解釈しようと腐心する批評家ほど間の抜けたものはないのではない

か。謎は難解であればある程、謎解き遊びに熱中する俗衆の人気をあつめるのである。

昭和期の日本の近代詩人の一部のもたちがモダニズムと称する得体の知れぬ闇汁歌を以て、得々然として俗衆を擲擻しつづけたのは、△ものへゆく道▽を失つた不能者たる彼らが、ひたすら近代西欧詩を粉本とし、できるだけ忠実にこれを摸倣剽窃しつづけたことを意味するものであり、△知性人▽を自負して一段高いところから大衆を見卸してゐるその傲岸な態度は言語同断といふべきであらう。<sup>(22)</sup>

## 13

現代に於ける△大和言葉▽の混乱と錯迷とは、モダニズムの詩や短歌に即して最も端的にこれを看取することができる。然し真の日本詩や短歌をその本来の生命に甦へらせるためには、この混乱は一日も速かに糺されなければならぬだらう。そこにこそ詩人本来の任務はあると思はれる。すでに白秋にその志のあつたことを一穂はその白秋論のうちにも明確に記別した。近代詩は、「成るものではなく、為すところに生れる」と確信する一穂は、感性語としての国語への指標をつねに意識の深処に保ちながら、西欧抽象語系の語彙をも自在に駆使しつつ、西欧近代前期の詩学と方法論に立脚して日本近代詩の宇宙を、力学的に構築しようとして試みた詩人として、まことに稀有な殆ど唯一の詩人であつたと思はれるのだが、彼もまた白秋とその志を等しくして、言葉を正すことを、その生涯の任務とした。

## 14

以上、一穂の雄渾精緻な観想を主軸とし、ときにいささか私見をまじへつつ、詩語としての△大和言葉▽の出自と性格について粗描してきたのであるが、この一文を閉づるに当つて、一穂の究極のクレドをさながらに刻銘したかと思はれる左の数行を鏤刻しておくことはやはり筆者の義務に属すると言つてよからう。

一穂はまづ日本近代詩を目して、「それは西歐詩学の原理とその方法に拠つて立つもので、語法すら翻訳日本語で、嘗てなく、またどの国にも在り得ない、まことに摩訶不可思議国の詩であつた。スニール・レアリスムの日本詩はその一例にすぎない。このやうな国語の無秩序は、意識の混濁を示すものだが、日本人のゐない日本なるものが、ここに現存するかぎり、詩人とは言葉を正すものでなければならぬ。わが詩歌發生の根源に遡つて感性語の性格を述べたのは、太初(23)の純潔にして精気ある火をめぐる祭の歌声に、ひとすぢの命の脈搏をきき得るからである。……すべての歌は、内からの火に照らされて踊りめぐるものでなければならぬ。それは生の讚歌でなければならぬ」とその所信を披瀝した。

かく記別したとき、一穂が想ひを馳せてゐたのは、もとより記紀の歌謡や万葉の長短歌であつたらうが、安江不空こそ、この「太初(23)の純潔にして精気ある火をめぐる△祭の歌声▽」に常住に耳を傾け、これに緊密に応和しつつ、明治・大正・昭和の同胞のために、真正の△大和言葉▽を保衛し、その絶妙な流露に於て本来の△大和歌▽を甦(24)らせ、△言葉を正す▽比類なき大任を達成した絶類の歌人であつたことをここに銘記した上で、実作に証あかしされたその△大和歌▽の世界の扉を開いてみたいと思ふのである。

## 附記

一穂の所説には、余りに簡淨にすぎた飛躍したり前後錯雑するところも多く、往々にして理解に困難を覚えさせられるところがなくもなかつた。それで私見により補足したり、パラフレーズを試みたところも少くないが、それによつて彼の真意を著しく歪曲したところはなかつたと考えてゐる。しかし筆者の理解不足のところについては、大方の教示を頂ければ有難い。読者各位は、一穂の詩とともに「黒潮回帰」、「古代緑地」その他の諸篇を精読せられ、彼の言霊の真髓に見参して眼睛の清涼を期せられたい。



—昭和六十年八月廿七日—

## 註

(1) 和辻哲郎先生の名著「風土(人間学的考察)」が刊行された昭和十年の秋深き一日、筆者は友人O君の邸宅内にある撞球室で、先生がこの女婿と手合せして居られるところに居合はせた。何気ない調子で一突きされた先生の白球が、精確な軌跡を描きながら確実に得点を重ねてゆくのに何とも言へない興味をそそられて眺めてゐたが、休憩のとき先生はライブニッツが撞球に堪能であつたことに言及され、「この球技も一種のハライブニツイーレンVですよ」と言つて愉快さうに破顔されたことを、今もなほ、アリ／＼と思ひ浮べるのである。名著「風土」の流麗澄澈した行文に魅せられて、「旅行記」も先生級の人の手にかかれれば、これ程詩味豊かな「Nova Scientia」になるものかと感嘆を禁じ得なかつた若年の筆者は、撞球に於てもハライブニツイーレンVを楽しんで居られる先生の新鮮なエスプリに改めて瞠目させられた。爾来滿五十年、先生の「風土」はいまは世界的名著として、益々稔豊かに日に新たにフレッシュな影響を及ぼしつづけてゐることは周知の通りである。

ところでこの名著の一環をなす日本の風土学的考察は、特に限定を施して、日本水土の現象学的考察とする方が、事態に一層忠実であると思はれる。それは本章の展開に於て確認して頂けると思ふ。

このハ水土Vといふテルミノロギーは何も筆者の創見ではなく、すでに元禄のむかし長崎の人西川如見の著「日本水土考」にみられるものである。著者は、周易に通じ、朱子の形而上学にも参じてゐたらしく、日本水土の境位と性格を簡潔遒勁な筆触を以て素描してゐる。本書に著者の付した序文を掲げてその見識を窺ふよすがとしたいが、少し長いし、文も古めかしいので、要旨をのべることにする。

近頃異邦人の手に成つた世界万国の地図は、地理学者が、よつて以てその水土の状を察すべき客観的資料なのであるが、万国は、各々自国を上国と考へ、その判断の根拠を自国の説に置いてゐる。しかしこれは要するに手前賞めにすぎない。だがいまこの万国地図を熟察すると、客観的に日本が上国であることがわかる。これは決して手前賞めではない。「茲に於て日本水上考を著して以て同学に示す。苟も此の義を以て異邦人に談ずと雖も、豈に之を拒むことを得んや」といふのである。(昭和十九年刊、岩波文庫版「日本水土考、水土解弁」その他一編。)

(2) 三井甲之(明治十六年—昭和廿八年)。子規正系を以て任ずる。歌人としての彼の信念を最もよく披瀝したものは「和歌

維新」(昭和十七年刊)であらう。昭和四十四年刊行の「三井甲之存稿」もこの点で参考になる。その詠草は「しきしまの道会」(代表者松田福松氏)刊行の「三井甲之歌集」にすべて収められてゐる。なほ聖徳太子や親鸞についての研究も篤実なものであり、△大和言葉▽の呼吸について、教へられるところが多い。大須賀乙字(續)―明治十四年―大正九年。大正十年刊行の「乙字句集」は二千句を収める。その後、昭和八年、岩谷山梶子校訂の「乙字俳句集」が紫苑社から刊行された。俳論としては、「乙字俳論集」として大正十年、吉田冬葉主宰の獺祭発行所から刊行された。三井甲之、芳賀矢一、岩谷山梶子、相沢暁村、四氏の序がある、家蔵のものは昭和十二年の第四版であるが、内容に増減はない。昭和五十三年、村山古郷氏によつて略々その半数が、講談社学術文庫に収められた。また昭和九年、志田素琴、松本金鶏城両氏の序を付して「俳句作法」が刊行されてゐる。両者、合して乙字の句境を窺ふよいよすがとなる。これらは、所謂俳論としてだけでなく、言語芸術論として、大正から昭和の現在にいたるまで独歩の位置を占めるものであり、その方面の古典として永く生命を失はないであらう。

- (3) 定本、吉田一穂全集ⅡⅤ六頁上。
- (4) 同右、十頁下。
- (5) 拙著「若きニイチエの識られざる神」五二八頁以下。
- (6) 一穂全集、Ⅱ九頁上。
- (7) 同右 十二頁上・下。
- (8) 拙論、「ゲエテのダス・デモオニッシュとその克服への道」(関西ゲーテ協会年鑑第十九卷二二七頁以下)。
- (9) 旧貨幣大社、(祭神) 底筒男命、中筒男命、表筒男命、息長足姫命。(不空はこの大社の「絵所預」の職にあつた)。
- (10) 城西大学人文研究第十一号所収、拙論「歌人安江不空」。
- (11) 一穂全集Ⅱ十四頁上。
- (12) 同右 一一九頁。
- (13) 拙著、「ゲエテの古代的転回・跋・ゲエテ的世界観について(二三九頁以下)」。
- (14) 「エッケルマンとの対話」(千八百三十二年三月十一日)。
- (15) Ludwig Klages: Die psychologischen Errungenschaften Nietzsches. Zweite Auflage (1930) S. 147~157 (Zur Psychologie des Christentums).

(16) ハスターウォーズⅤに於て先手を制するためにハスペース・シャトルⅤのやうな恐るべき宇宙敵制兵器の開発が止めどなく進められてゐる。今回日本からも三名の乗員候補者が指名された。所謂ハ宇宙Ⅴに限りなく憧れつづけてきたこれらの候補者たちにとつては、それは千載一遇の好機で無上の名誉かも知れないが、そのやうに単純に考へて済されることであらうか。本来、この地球上に於てその天命を充足すべきものと考へられる人類が宇宙空間の無重力状態に耐へるために、二年三ヶ月の厳しい訓練に服し、たとへ一時的であつても、物理的な意味で、ハ非人間Ⅴの状態に変質させられねばならぬといふことは、私たち門外漢にはまことに痛ましいことに思はれる。このハ宇宙入りⅤを達成して地球に帰還したとき、そのハ非人間状態Ⅴからの恢復はどの程度まで可能であらうか。縷説のやうに、絶類のハ水土Ⅴのなかで長養され開発された日本民族の偉大な受動的直観力は、そのハ宇宙入りⅤの決定的瞬間に、どのやうに目覚め、何を直観するであらうか。たとへそれがどのやうにささやかなものであらうとも、願くばその貴重なハ玄体験Ⅴが、廿一世紀に予想される人類と地球の絶類の危機を突破するための最初の火口として役立つものであつて欲しい。

第二次大戦後四十年、この間に於ける地球の荒廃はまことにただならぬものがある。このままでゆけば地球の壊滅に今後余りに時間はかからないであらう。今回の痛ましい日航機墜落事件は人災と言はれてゐる。もとよりその人災たる所以は厳しく追究されなければならないが、このやうな未曾有の大惨事には、普通の人智を以て軽々には窺ひ得ない機微な消息もあるのではないか。人間の思ひ上りに対する天の警告といふやうな。「民威を畏れざれば大威至る」とは、二千年前にすでに古人の戒めてゐるところだが、今日もこれを無視してよい理由はないだらう。先日東北大学の教授某が、遊星からの電波受信の研究に熱中して寢食を忘れてゐるといふことが報ぜられてゐた。この人の勤勉と熱意とは敬重さるべきだが、その洩した所感に一寸見過せないところがあつた。即ち他日人類が、この地球をはなれて、居住可能な宇宙空間に移ることになつたとき、地球に残るものは、怠惰で無気力な人間たちだけであらう、と。これは比喩的に軽い気持で言はれたものかも知れないが、然しこのやうに無責任な発言の底には、地球こそ、かけ替のない人類の故郷なのだといふ自覚の欠除があるやうに思はれてならない。そこに生の厳肅さ、その歎びと悲しみに全く無感不覚で育つたかと思はれる人の、中学初年生的無邪気さとともに、恐るべき傲慢さが感じとられた。

私たちの祖先は、この地球を唯一無二の故郷として、深くそこに根をおろし、営々努力、辛酸を凌いでその輝かしい文化を築き上げて来たのである。失敗も少くはなかつたが、その気魄と辛苦の克服とは、常住に私たちを激励しつづけて止まないものである。

このことは人類が地球を本拠すべきものである限り、未来永劫変ることはないだらう。宇宙空間に移住して、何の憂苦もなく天体観測に耽つてゐればよい、などと言ふ考へのどれ程、輕薄幼稚であるか、この教授氏もいつか身を以つて知るときが来るだらう。私たちとしてはひとり人類の間だけでなく、生きとし生けるもの、有機無機の万物と和合して、このかけがへのない地球の保全に渾身の力を注がなければならぬと思はれる。地球など怠惰で無気力な人間にまかすといふやうな幼稚極まる思ひ上つた妄想を、平気で口外する大学教授の横行するやうな時代を「末世V」といふのである。

(17) 原文は Fischer 版、選集 (in zwei Bänden) の Zweiter Band 三六五頁以下に収められてゐる。阿部次郎の訳は明治四五年一月(1912)であるから原文(1903)より九年後のものであるが、本邦に於けるゲオルゲ、ホーフマンスタール關係の文献としては最も早いものの一つであると思はれる。なほ本訳は大正十一年八月改造社版「学芸論鈔」二六四頁以下に収められてゐる。

(18) 湖南も言ふやうに蒼海詩はまさに「高古勁秀名状すべからざる」ものであり、これに近づくことは容易でないが、現代の私たちにも親しみを覚えさせる墨絵にも似た縹渺たる次の一篇を録して縁結びのよすがとしたい。

九月十三日夜。同相良・中野・丹羽。訪梧竹向島幽居。「掉桂舟。涉清流。星之伍。月為儔。風相交。聊忘憂。充矣樂。優哉悠。晴烟漠漠長川夕。樹色蕭蕭夾岸秋。鷺立汀。雁下洲。何処一声玉人笛。嚙曉排雲思所由。頃刻雨霜稠。(全集第三卷八十丁裏)

桂舟に掉さし

清流をわたる

星と伍し

月、儔ともとなる

風、相交り

いさゝか憂を忘る

まことに楽しいかな

優なるかな、悠

晴烟漠々、長川の夕

樹色蕭々、夾岸の秋

鷺、汀に立ち

雁、洲に下る

いづこの一声ぞ、玉人の笛

嚙曉として雲を排す、思の由るところ

しばし雨霜稠し

- (19) 蒼海は、青崖の長篇七言古詩「風雨觀華嚴瀑布歌」(今は散佚して伝らない、「詩存」にもみえない。)に対し六回に亘りその原韻を用ゐて長篇を詠ひ上げてゐる―全集巻四、四十一丁より四十四丁、表裏に亘る―が、そこから稽へても蒼海の心折がいかに深かつたかを想ひみることが出来る。本詩を踏まへ蒼海は青崖を評して、李白と英風を争はんとするものだとはいふのである。

- (20) Alfred Baumeier: Studien zur Geistesgeschichte S. 71: Hegel und Kierkegaard 参照。

- (21) 田中晃著「生哲学」六頁―七頁。

- (22) 詩人としてはハ助平根性Vに発するこのやうな遊戯的創作のすさびは、今に始まつたことではなく、中世に於ける大連歌師宗祇の「豊字連歌百韻」に於てすでにその先蹤を発見することが出来る。これはハ大和歌Vの正統的継承者を以て任ずる純正連歌に於ては、異端として厳しく戒められてゐたものらしいが、宗祇としてはよくそれを心得た上で、謂ば番茶一服の氣やすさで、ここに遊んだものと思はれる。いつばし、ハイカラ氣取で、安物のベレー帽や銜へパイプで、モダニズム妄想を無作法にまきちらされたものでは堪つたものではない。なほ宗祇の「豊字連歌百韻」については尾崎雄二郎、島津忠夫、佐竹昭広共著「和語と漢語のあひだ」参照(筑摩書房)。

- (23) 吉田一穂全集Ⅱ、百二十三頁。

- (24) 一穂にも耿之助にも勘助にも、とりわけ白秋には膨大な量の短歌作品がある。然しそれらは当事者諸氏の自負にも拘らず、純正短歌ではなく、短歌形式に従つた近代詩の一変種と考へらるべきものであらう。不空の真正ハ大和歌Vとの厳密精緻な対照に於て、人はこの間の微妙な消息を心悟すべきであると思はれる。

本来的にみれば、全民族的に根元的な直観の体现者、即ち真正のハ古代人Vとして生れた不空は、生動してやまぬそのハ原体験(Urlebnis)Vから全生涯を通じて、長短両域に於て比類なきハ大和歌Vを放射することが出来た。歌は、難産の産婦のやうに一首々々、苦悶呻吟して産み出すべきものではなく、滾々として無尽蔵に湧き出して来るものでなければなら

ぬと言つてゐる。

ところで不空の歌業を全く忘れ去つた現代日本人たちも会津八一の諷詠を昭和期第一級の作品として讃嘆してゐるやうであるが、所謂歌壇なるものと全く交渉なきところで詠まれたその歌調の流麗さを思へば、それもまた道理あることであらう。然し八一体験の根柢は△中世日本▽即ち、民族的には△教養体験 (Bildungserlebnis)▽の世界である。一方不空にとつても△中世日本▽は結縁深き世界であり、書、歌、画の諸領域に於て優れた業績をのこしてゐる。第一次的に△古代人▽であつた不空は、同時にまた卓抜な中世人でもあつたことをそれは証示してゐるものと言へるだらう。

民族的に根元的の世界に生きてその△原体験▽から永言することの出来た不空と、民族的に△教養体験▽の世界の消息をうるはしく伝へる八一の諷詠、両者ともに△大和歌▽でありながら、その光とかげの交錯に微妙なニュアンスの相違が感ぜられる。要は不空が単に八一を、上方に超越してゐるといふことではなく、深き親縁性を保ちつつこれを包越してゐるといふことである。この間の消息は微妙で語黙のいづれを以てしても伝へがたい。不空の歌、書、画の三蹟に綿密に結縁を深めて自知してもらふ他に道はない。いづれにしても真の△大和歌▽と近代短歌、これは相互に全く別趣のものであることを心悟して欲しいものである。

△万葉指標▽を極則とした子規究極の真意は、まさに△大和歌▽の諷詠を目ざしたものに他ならず、その上乘の作に於て彼は率先、これを身証してみせたものと言つてよからう。しかし嘔心吐血の思ひに子規のこの真情を挙揚しつづけた甲之に於てもその全歌集に鏤められた△詠み人知らず▽級の△大和歌▽例へば△ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を▽の如きは必ずしも多くはないが、然し「伏見桃山御陵参拜連作十五首」の如きは類ひなき△大和歌▽として永遠にその光芒を放ちつづけるであらう。明治、大正、昭和の三代に亘る真正歌人たちの作から真の△大和歌▽を選抜して一巻の歌集を編み、後世に伝へてもらひたいといふのが筆者の念願である。